

TRAVEL SKETCH

Mariko Sumikura



すみくらまりこ

旅の素描

Sketch in Turkey

Citrus

Citrus fruits has grown heavily even in January. Lemon trees drooped heavily. All smallish oranges showed faces like a little sun. A dray went path through a field, spilling them unsparingly.

The moon of Adana

In a casual party, a Turkey professor who got drunk in the alcohol Raki which will become white in the water, began to sing "Tsuki no Sabaku"(Japanese song, the desert of the moon). Seemingly he lived in Tottori city for two years, and he got good memories. While returning to our hotel, I just looked up the sky, the full moon was illuminating the dome of the mosque.

Long-distance Bus

The drive for 5 hours. I talked with the 20-year-old soldier of a next seat in awkward Turkish. He said on ride for a vacation, and homecoming. From the pocket of the chest, and showed me the fiance's photograph with smile. Seemingly he was the operation staff of a military motor vehicle. Young man of any countries, be happy in the future, I could not but prayed for them.

Avanos

A long time ago, in the Silk Road, there was the station every 20 km. Town Avanos where the caravans has taken a rest. Strangely shaped rocks, the underground city where the Christian lived in hiding, and a valley of pigeon...Human life is changing year by year, but these stage of old history remain the air as ever. In a potter's work studio near Red River, a salesman murmured me "This blue pigeon carries you happiness" I was taken seriously, and I bought the ceramic blue bird.

Jar for Tears

The animal, human being who kill feeling uniquely. But sometimes it is not made. How much tears flow secretly! "Jar for tears"...was sold at the corner of a dusty shop. It seems to be difficult environment for human life, only living thing was apricot trees. In poor daily life, even rejoice effects shed tears.

The Bosphorus Channel

Ships in the Marmara bay does not move. Because they are waiting for the turn of passage. Ships which comes out from and into the Black Sea, I am wondering where they go for? The width of the channel is only 500 meters. Between Asia and Europe, the distance is so close as far as loud voice is audible.

Blue Mosque

The old capital Constantinople, the Byzantine Empire.

I explored in the town to think about the history visiting heritages showing reverberation of prosperity, and enjoyed the scent of aestheticism from walls and stone pavement of the old city, from the mosaic of a mosque ceiling. The time has stopped at the center the mosque, holding 500 km distant ahead with Kiev, Vienna, Rome, Jerusalem, holy places.

トルコ素描

シトラス

一月だというのにシトラスはたわわに実っている。レモンは重そうに垂れ下がっていた。小ぶりのオレンジは、みな太陽の顔をしていた。それらを惜しげもなくこぼしながら荷車は野道をいくのだった。

アダナの月

小宴で、水を入れると白濁する酒（ラク）で酔ったトルコ人教授が「月の砂漠」を歌いだした。鳥取で二年住み、良い思い出があるらしい。宿舎へ帰る途中、ふと見上げると満月がモスクのドームを照らしていた。

長距離バス

五時間のドライブ。つたないトルコ語で隣席の二十歳の兵士と話す。休暇で帰省の途中だという。胸のポケットから婚約者の写真を見せ微笑んだ。軍用車両の運転係らしい。何処の国の若者も前途に平和あれと祈らずにいられない。

アバノス

昔、シルクロードでは二十キロごとに駅があった。隊商が休んだ町アバノス。奇岩、キリスト教徒が隠れ住んだ地下都市、鳩の谷・・・人だけが変わり、歴史舞台は変わらない。赤河のそばにある陶器工房では、「青い鳩は幸福を運んでくる」との売り口上を真に受けて、ひとつ求めた。

涙の壺

唯一、感情を殺す動物、人間。でも時々それができない。人知れずいかに涙が流れることか。ほこりっぽい店の片隅に売られている「涙の壺」。杏（あんず）しか育たない苛酷な地。貧しい暮らしでは嬉しさすら涙の素となる。

ボスポラス海峡

マルマラ湾の船影は動かない。みな、通過の順番を待っているからだ。黒海から出る船、入る船、それぞれに荷と人を乗せて何処へいくのだろう。海峡の幅は五百メートル。アジアとヨーロッパは声が届くほど近いのだ。

ブルーモスク

ビザンチン帝国の都、コンスタンチノーブル。栄華の残響と、耽美の香りに酔い、身を任せて歩く。旧市街の壁や石畳。モスク天井のモザイク。聖なる場所の中心、ドームの中で時は止まっている。キエフ・ウィーン・ローマ・エルサレムを全方位、500キロ先に見ながら。

Sketches from Macedonia

Figures of the Mountains

While the green and the landscapes are mild in my country, the desolate faces of the mountains look painful in this land. The trees that have filled in the end my horizon spread their roots farther and farther sideways looking for soil scantily accumulated on the bare rock. Here soldiers would find no hiding place.

Red Bricks

Houses built of red brick look fragile, like snails without muscle or like skeletons. Is brick-making, done by solidifying and drying the crunchy red earth in a frame, the only occupation in this wasteland? Suddenly, the memory of an intense earthquake comes back to me. The red bricks are telling me not to worry. In this magnanimous land, the cycle of destruction and regeneration revolves slowly'.

Lake Ohrid

A border runs right through the middle of the lake. Young people are diving into the water from the bridge girder, but they don't swim to the other shore. They are much more afraid of the invisible line than of depths of the river. The swimmers know that they should never make the water bloody.

No cloud springs up here. The sky reflects the color of the blue Aegean Sea in the distance and the water mingles the colors of tender grass. The pure tiny lake is embraced by the mountains.

Soundless, waves barely lap the morning shore. The water is perfectly clear, unscented, and an invisible wind cools down my whole body heated by the Poetry Evenings.

Ah, indeed. I know "time" has brought me to this place. Although I might have been totally baffled by the swirl of anguish, I wonder if I have been washed ashore in this place by the power of its energy; to this land of supreme bliss.

Focus

I see you across the flowers. If I look at the flowers, I don't see you. If I look at you, I don't see the flowers. If I fix my eyes on both, my eyes refuse to work; because I am a living creature.

Fluff

Like feathers of a bird, a round fluff is fluttering in front of the poets. If you stick on my tote bag, you will bloom as a Japanese flower. If you stick on one of my friends' clothes, you will bloom as a foreign flower. Australia, India, Sweden, Belgium, Russia,

Germany... Where would you want to go? Go wherever you want; stick on whomever you want. You will be welcomed wherever you go, although it might be best for you “to bloom in this place.”

A Spring in the Forest

Sunbeams playfully stream through the leaves of trees around a dark green spring, in which fairies would seem to be living. Nobody would touch the beauty of the water. The leaves reflect the light, the bottom of the water reflects the light, the woods reflect the light, and the boat reflects the light. The silence of the spring fills the deep forest.

Tears of the Graces

Our church is dedicated to the Graces. Appreciating the Graces who have given us the language and its joy and also the music and its joy, poets around the world have got together here to present the best thing that human beings can offer at this moment. Indeed, human beings carry the burden of karma; longing for good while caught in evil because of too much anguish.

When a beautiful aria resounds throughout the church, the souls of poetry there are instantly united as one to rise up into the dome. The Graces shed tears crying, “Well done, well done!”

マケドニア素描

山容

緑やさしく容（すがた）なだらかなわたしの故里、此の地にあつて山肌剥き出しの荒涼が辛い。漸く見せる樹木も、岩肌にわずか蓄えた土を求めて、根を横に横に張っている。ここでは兵士の隠れ場所もないだろう。

赤煉瓦

煉瓦積みの家屋は、見るからに脆い、筋骨のない蝸牛のよう。さくさくした赤土を枠で固めて干す煉瓦造りは、荒れ地での唯一の生業か。突然に激しい地震の記憶が甦るわたし。心配は無用と赤煉瓦が云う。おおらかな土地に、破壊と再生の輪廻がゆっくりと回る。

オフリド湖

湖の真ん中を国境が走る。若者たちは橋げたから飛び込みに興じるが、対岸には泳ぎつかない。見えない線に比べれば川の深みなど怖くないのだろう。決して血で濁さぬよう弁える遊泳者。

此处では雲は湧いてこない。空の色は彼方のエーゲ海の青みを映しているのか、水の色は柔らかい草の色と交っている。そんな清らかな小湖を山々が抱きしめている。

朝の浜辺に、波は音なくひた寄せる。水は匂いなく澄みきり、見えない風はわたしの全身に及んだ詩祭の昂りを冷やす。

嗚呼、そう、そうだったのか。「時」がわたしを此处へ運んでくれたのか。弄されたはずの苦しみの渦、その勢いの力がわたしを此处へ打ち上げてくれたのか、この至福の地へ。

焦点

花の向こうに君がいる。花を見れば君が見えない。君を見れば花が見えない。両方に目を凝らすとわたしの目が駄目になる。なぜならわたしは生身だから。

綿毛

鳥の羽根みたいに、丸い綿毛が、詩人の前を飛んでいる。もしわたしの布袋にくっつけばおまへは日本の花と咲く。もし友人の服にくっつけば異国の花とさく。オーストラリア、インド、スウェーデン、ベルギー、ロシア、ドイツ・・・おまえは何処へ行きたい。好きに飛べよ、好きにくっつけ。どこでも迎えてくれるから。「この地に咲く」それがおまえには一番ではあろうけれども。

森の泉

妖精が棲んでいそうな、緑濃い泉に、木漏れ陽が遊ぶ。誰も触れない水の美しさ。光は葉を照り返し、その光は水底を照り返し、その光は樹を照り返し、その光は舟を照らす。深い森の泉の静けさ。

美神の涙

吾々の聖堂には美神が祭られてある。吾々に言葉とその喜びを与え給うた美神に、吾々に音楽とその喜びを与え給うた美神に、感謝をこめて今このとき人として最良たるものを捧げるため世界中から詩人が集う。ああ、人は苦しさのあまり醜悪に墜ちながら善きものに憬れる業を背負っている。

美しいアリアが堂内に響き渡るとき、立ちあう詩魂が一瞬にしてひとつとなり丸天井のう上に立ち上りゆく。美神は「善哉、善哉」と涙する。

スロバキア素描

琥珀街道

旅のはじまりはウィーンだった。トラムが市内をめぐり、地下鉄が走り、バス・列車と交通要所のすべての条件を満たしていた。というのも古代に発達した琥珀街道で、ウィーンは重要な中継地であった。採れた琥珀は北欧から中欧を抜け、アドリア海まではるばる馬で運ばれた。それは塩とともに貴重な交易品だったのだ。

往時、琥珀の逸品は庶民の手に渡らずに、王族や権力者の手に渡っていき、王冠や宗教儀式の用具に使われた。しかし研磨の技術は庶民のものとなり、いまでも継承している。王族は滅びても、工房のなか、技術は滅びない。

すでにすり減った石畳。100年前までは、まだ馬車が往来していた。高速道路の発達と街道の繁栄を奪うのも、不思議なことではない。空路の発達が港街の賑わいを奪ったように。人は便利なほうへ流れていく。

街道を思わせて、一昔前には歌劇場へ向かう人々を運んだ馬車が、いまでは観光用として少ない客を待っていた。コツコツとさびしい足音だった。

スカリツア

市長に謁見するため前室に入った途端、美しい歌声が響いてきた。オルガンの音にのせてその地に伝承された歌を女性が独唱してくれたのだ。わたしたちは座ってうっとりとして聴いた。「スカリツアへようこそ、あなたがた」言葉は分からなくても、その気持ちを解した。

遙か1万キロ離れた極東の日本から、またノルウェーから、スウェーデンから、ルーマニアから、キプロスから集まった詩人が挨拶に伺っているのだ。音楽が止むと、にこやかに市長が現れた。スカリツアのあらましを述べて、詩祭の成功を願ってくれた。葡萄が実り、新酒ができているとのこと。グラスワインで互いの健康を祝していただき、記念署名を残した。

聖フランチェスコ修道院での朗読会。こんな美しいところで詩を読むことのできる幸せ。笛もヴァイオリンの音も天井の複雑なアーチ曲面を自在に飛び交い、空中で響き合ったあと、わたしたちの耳に届いた。

詩もそのように日本語、ノルウェー語、ルーマニア語、トルコ語、スウェーデン語がスロバキア語と響きあった後、聴衆のところに届いた。最後の拍手はとも大きく、いつまでも鳴っていた。

美しい街スカリツア、聖フランチェスコ修道院を真ん中に整った家屋が広がっている。ほとんどチェコに近い北端に位置するところ、昔は戦闘があったに違いない。でも、いまは静か。平和がよい、うまく棲み分け、必要なときには助け合い、互いに伸びていくのがよい、そう思えた。聖フランチェスコがスカリツアを、そして街を愛する人々を守護していた。

美しい半月が塔のうえで少し休んだ後、街はゆっくりと暮れなずんでいった。

宝石なる街：ブラティスラバ

手の上で眺めて愛でる宝石のように、徒歩で一回りできる旧市街。繁栄の香りをそのままに、いまなお煌いている。小高い山の上には、ドナウ川と市街を見下ろすブラティスラバ城が構えている。迷路のような細い路は、旅人をいつのまにかさきほど歩いた処へ連れ戻す。

広場にはかつて市が立っていた。商人たちはこれ以上大きなものを持ってはならぬ、武器とみなすぞ、と三十センチばかりの包丁形の鋳物が石壁に塗りこめてある。また布を買った客がもういちど尺を測りなおすための物差しが横に並んでいる。また、税を逃れるために砲弾を壁に放置したままの家屋。モーツァルトが6歳のとき演奏した建物。リストの胸像。襲いかかる近代化の波をわずか残ったミハイル門と城壁がしっかりと食い止めている。

かくして、ブラティスラバの旧市街は昔を守り通している。とおもいきや、ウィンドーに並ぶのは 트렌ディーなファッション。その落差が妙な感覚を引き起こす。旧都ブラティスラバはマリア・テレジアに愛された街。それは宝石のように夜の闇に浮かんでいた。

若人の凝視-トルナバの高校にて-

三百人の高校生が着席してわれわれ詩人を待っていた。新学期が始まったばかりの教室は歓迎の手作りポスターで飾られていた。かれらなりに詩人をイメージし、イラストを描いていた。なみだを模したのもあったその学生はかつて悲しみのかげらを詩に探し打たれたのかもしれない。

日本人の音楽家が演奏すると、すぐに通じ合える心地よさで、歓喜の表情に変わった。そして、それまで穏やかだった顔が、詩を聴くときに、みなまっすぐな目を詩人に向けた。そして時がたつほどに詩の世界に入り込み、想像をめぐらせ、目は一点を凝視するようになった。詩人の姿を見ているようだが、実は違った。かれらの目は美神がめぐり合わせた幸福な贈物、その心象を見つめていた。

彼らのまっさらな海綿の心に、詩のことばはすぐに沁み渡る。詩人が選んだことばはかれらの頭の中で、踊るように脈絡し、ひとつのイメージを作りあげる。そのイメージ同士が作用しあい、ひとつの絵ができる。そしてドラマティックな数分は終わる。

若人のまなざしは、真実への凝視だ。かれらの望むものを、詩人は与えられたのか。その答えは未来まで留保されている。

古伊万里がいた

ペツニクの丘にある邸宅は昔の城だったそう。ひとつひとつ早口で説明する女性だった。

入口には青い馬車が丁寧に磨かれてあった。毛皮を敷いた金の櫓、四万冊の羊皮紙の蔵書。

そしてトルコ軍を食い止めるための何人の首を切ったかという剣や武器が展示されていた。

プリンセスが着たドレスも、いまにも歩きだしそう。そして夫の肖像画、妻の肖像画が並んでいた。

夜ともなれば、かれらは会話するのだろうか。次々と部屋を回り、鍵束をもつ

た女性はエピソードを話した。時の花嫁を喜ばせるためか、リモージュ焼きの食器セットが安楽椅子の後ろに飾ってあった。

そして、いっぱい伊万里焼の壺や皿が「いた」。それらは日本から貿易商人の手を経て、この地に届けられ、いままで何百年もそこで暮らしていた。それは家が絶えたあとも、家人に愛された思い出を偲んで生きていた。

ペズニクの小さな花

人との邂逅も一期一会の旅にあって、花もまた然り。この地に咲き続ける花とところを通わし、去っていくのも詩人の礼儀といえよう。きちんとファイダーに収まってくれる彼女たち。足元に落ちる葉も、石畳も、そして舗装タイルさえ、思い出のよすがとなってくれる。

通りを挟んで平屋の家並みが続く。ハイストリートにはお店が並ぶ。それぞれに色彩した扉や窓硝子を通してみるカーテンレースが美しい。ひとびとは思い思いに歩いている。幼児を連れている夫婦や、老人夫婦、友達同士がゆったりと歩いている。

時間があれば、丁寧にワニス塗りしたベンチに座って本を読みたい。丘を吹きぬける風を感じていたい。そんな密やかな夢が生まれる。再会を約していない御方を突然訪ねたい、そんな突飛もない夢が育つ。わたしはまたここを訪れるかもしれない、そんな予感もする。名も知らぬ花が誘っているから。

小さな缶バッジ

ペジノクのある修道院で朗読のあと、ひとりのスロバキア詩人が近寄ってきた。

音楽を添えた朗読CDを呉れ、挨拶を交わした。そして街を去ろうと赤いミニバンに乗り込もうとするその時に、彼女は駐車場へ再び現れた。みなお土産を買いたいと口々に云っていたときだった。

彼女はやわらキプロス詩人とわたしの手をつかみ、「ちょっとだけわたしの店に寄ってちょうだい」とずんずん強い力で引っ張っていった。「そこの角なの」10Mほどのところに彼女の生家があった。小ぢんまりとした、昔ながらの菓子屋だった。テーブルがいくつもあったが電気は消えていて客はなかった。壁にはキャンデーなどの駄菓子が並べてあり、レジの横のショーケースにはケーキが入っていた。

彼女はすでに皿とスプーンを手に持っている。「どれがいい？」と訊いてくれたので、キプロス夫人は断ったが、わたしはひとつを指さした。（時間が無い、早く戻らないと）ゆっくり味わう暇もなく、甘いババロアケーキを頂いた。「ごちそうさま」とお皿を返すと、嬉しそうな表情で小さな缶バッジを駄菓子の棚から取って記念に呉れた。

彼女もそこのところ分かっていので、すぐに駐車場へ連れ戻してくれた。歩きつつよく喋っていた。「いまは大きくビジネスをして会社を持っているのよ」ということから、彼女はわたしたちに生家を見せたかったのだ、ただそれだけ

だったのだと了解した。詩だけではなく、詩を書く自分を、生家を見てちょうだいということなのだ。

でも、あのできごとは夢のなかのできごとだったのかと思う。みなスーパーでチーズを買っていた数分のできごとだったから。しかし心の深い処まで食い入る交流とはこんなところにあったのだ。いや、夢ではない、小さな缶バッジがちゃんと残っている。

ひまわりと風

ウィーンからブラティスラバまでは平坦な道が五十キロ続く。どこまでも続いている。とうもろこし畑を過ぎれば、次はひまわり畑、それらはもう枯れて採り入れを待っていた。いまは食用の油も、いつか車を動かすために使われる日がくるのか。そう思えば、一帯が広い油田に見えてくる。

目を凝らせば、発電用の風車が回っている。銀白色にとがった三枚の羽根だ。十基ばかり行儀よく丘の上に一列に並んでいる。みまわしてもどこにも人影はない。幸福で静かな暮らしは点在する村にあった。風車はかれらのこぎれいな暮らしを照らすに十分な光を与えているようだ。

ひまわりは、枯れて油を絞られるために太陽を浴び尽くして枯れていた。風はそのうえを朗らかに滑り、風車へぶつかっていった。

地中海素描

紺青の空に
マルセイユの
水夫を護る
聖母にて
天にも近く
山頂に立つ

マルセイユ港から坂を上っていくと、まもなく山頂に立つ黄金の聖母子像をいただく教会の塔がみえる。ノートルダム・ド・ラ・ガルド（守護聖人教会）は、船舶と乗員、家族の安全を護っている。そう、帰港する船にとっては陸が近づくと聖母子像が金色に光って見えるのだ。豊かな交易による財力と、信仰の力がこの教会に集まっている。

それにしても、この空の色はなんと青いのだろう。ここでも空の色と海の色は、照らし合わせている。絵描きでなくとも絵の具を溶かし、その色を再現したいという誘惑にかられる。そして岩がごつごつする山肌のすきまを埋めるように小さな花々が優しさを添えていた。

港の観覧車

観覧車が止まっている。事故か？ 観覧車が速く回っている。そして止まらない。マルセイユ港の名物である観覧車に誘われたが怖くて乗れない。詩友が云うには、三周回って眺望を見るために止めてくれたとのこと。カフェでぼんやり眺めていたら、船着場の天井がミラーになっている。歩いている人々が逆さまに映っている。旅の疲れか、なにか不思議な感覚の時間を過ごした。じつに色々な人種の人々が散歩を楽しんでいる。ベビーカーを押す家族連れ、カップル、グループにはそれぞれの休日があるようだ。仕事に遊びに旺盛な人々がいた。

地球家族

バルセロナ
聖家族教会
鳩むる人々
地球の家族
裏切らぬ愛

ガウディの建築であるサクラダファミリア（聖家族教会）に人だかりは絶えない。バルセロナの人波についていくと広場に出る。漫然とした調和を嫌い、敢えての不調和を次の不調和で調和する。それは無防備な平和を嫌い、野性の感覚で危機を知り、乗り越えていく現代人に圧倒的に支持されるようだ。向か

いの硝子窓に映りこむ教会は、静けさに満ちていた。

ローマの松

無数の兵士
ありながら
名残す強兵
一握りなり
砂煙の無情



ローマは古代遺跡と暮す街である。大理石の彫像は、あちこちにたかだかと据えられ、今にも動き出しそうにみえる。それは勇者がこの国を造ったことを象徴する力の信仰のようだ。いっぽう画家は人間の尊厳を描き、哲学者は議論を尽くすことを共和の礎とした。いうまでもなく多くの無名兵士の血が流されている。いずこの地でも、戦役で名を残すことば難しいこと。砂煙のなかで斃れた若者の魂はどこへ消えたのか。ローマの松はなぜ屈曲しているのか。レスピーギの曲「ローマの松」を思い出しつつトレヴィの泉の界限を歩いた。

ポーター詐欺

船旅を終えて、バスでサボナからミラノへ二時間。相当に疲れて巨大な駅に着いた。若く感じのいい青年が笑顔で荷物カートを課してくれて、切符自動販売機に連れてくれる。買い方も教えてくれて、親切このうえない。そしてホームの改札まで誘導してくれる。まるで天使が降臨したかに思えた。少しお礼がしたいと思ったそのとき、耳を疑った。「ひとり10ユーロです」それは巧妙なかれの仕事だった。まんまとポーター詐欺にひっかかったということを知った。このことだけで文化の誇り輝くミラノが落ちぶれてみえた。

この駅のコンコースは4番線から18番線まで縦列に線路が並び、ここから始発する。電光掲示板は字が小さく、4番線と18番線にしかない。そのため、10分前に知らされるホームを確認すると走らなければ乗れない。座ろうなんて無理な話。乗る列車の確認、降りる駅の確認、何人かに尋ねてようやく乗れてコモへと向かった。

ポエトリー・スラム

雨が降っていた。寂しい駅だった。リフトもなく、階段を上って外へ出てタクシーを待った。何もまわりになく、不安が生じた。この駅で正解だったのだろうか？ タクシー運転手は親切で明日は晴れだと云ってくれた、それだけが慰めだった。

ホテルに着くとスタッフが二人、入口でわたしたちを待っていた。コモ大学の女学生とのことだった。

会場まで歩いていくと、すでにポエトリースラムは始まっていた。若手の詩人が舞台上で詩を暗誦している。かなりの熱演だ。審査員が五名、最前列にいる。終わるたびに、彼らは10点満点中何点か記して見せる。司会者は、会場の意見を聞きつつ、審査員に「その点でほんとうにいいですか」と迫る。変える審査員もいたり、変えない審査員もいたり、最高・最低点を除いてスクリーンに記される。出場者は10名。二回のパフォーマンスがあり、合計点で競う。詩をじっくり聴かせるというより、パフォーマンス重視が気になった。二人で掛け合って詩を読むのが最高点だった。甘かった。相当に練習をしたのだろう、完璧だった。それだけに、ニューウェーブの行く先が詩の本質と離れていかないか気になった。

再会の喜び

湖畔のビッツアレストランでウエルカムディナーがあった。そこで多くの出会いがあった。またイタリア詩人、レバノン詩人と再会をした。すでに互いの詩を知っている。出会いがあり、詩の交流があり、再会がある。これが国際詩人の流儀というべきか。

ビーズで作ったコンパクトを贈ると、偶然にも彼女もビーズでネックレスを作ってくれていた。イスラム教徒だと思いこんでいたレバノン詩人がじつはカトリック教徒だと知ったり、二回目ともなると様々な話で盛り上がる。詩人仲間が揮毫してくれた書、光、花、舞を贈ると、とても嬉しそうにされていた。明日はいよいよ詩祭が始まる。

コモの朝

鐘の音が街を起こす
わたしはバルコンで
コモ湖を眺めながら
詩を書き留めている

夜が濃くなるにつけ
ひとつ またひとつと
星々の光りは増した
家々の灯りも増した

闇を飾ってゆくのは

空に散らした星の珠
山に点在する灯の珠
湖をふちどる光の珠

詩の館から降りると
光の波が寄せてきて
水面を歩いている様
浮遊の美しい幻覚に――

暫らくは覚ますまい
この一粒の中にいて
美しさの一部始終を
詩に封じてしまう迄

窓から溢れる朝の陽が
わたしの一日を祝する
詩友との再会があった
新な出会いに恵まれた

はたして湖の底には
不思議な泉が湧いて
その効目が癒すのか
世の些事を忘れ過す

明日は悠然と起きて
一編の詩を手中にし
思い出と期待を胸に
コモの朝を遊歩する





Sketch in Romania

Fake guide

We arrived at the Bucharest airport late night. The staff was to pick up next morning, so we slept well. As we expected, he came and we got on his car with baggages. English speaking guide asked us showing the list of tourist spots in Bucharest, "Where would you like to go first?" We answered for the national art museum.

"Where would you like to go tomorrow?" "We'd like to go to Craiova within today."
"OK, where is the hotel?" I thought just strange of his asking and said. "Are you Mr. C, aren't you?" "No, my cousin asked me to pick you up this morning." My doubt was increasing.

Then I borrowed his telephone and spoke Japanese speaking guide about circumstances in order to call a poetry festival organizer. "That's strange, a staff of a poetry festival is waiting you at the lobby now." The staff reproached him and told to come back to the hotel at once. And we could join with poetry festival's staff safely, but the fake guide has disappeared.

Crossed the country

We crossed the country for three hours. From the window, we observed huge sunflower's field. It might be the time to take seeds, dried flowers has saved the energy of the summer and stained the field in black.

Corns also appealing the fertile soil, it reminds me poor corns of Azteca. Indeed farm products are the most important for the country. If we missed the policy, the country will fall in crisis. If self-sufficiency for food was promised, the country will be strong to crisis. I was moved very much to see rich product in Romania.

A Scene

Great view of
Farming land
In Romania
A woman walking
With a cow, peacefully

Friendship

In poetry festivals, we know close each other with deep connection through poetry and

their career and techniques. I got some new friends from Russia, Bolivia, Turkey and so on. There are also important poets as usual. Italian poet, Dante Maffia! He used to come down in breakfast as like us. I gave my book, "A woman who weaves the light", and he read aloud at once.

Opening Ceremony

It was held in a beautiful hall. Craiova culture and art academy awarded some people, we had the honor to be there as witness.

It was also Saturday, so I felt the city vibrant with life. Poetry reading was held in Opera Theater in the evening. Opera soloists presented aria in intervals between poetry reading. The final stage was full chorus, it was very beautiful.

Wounded Dove

There was a wounded dove near a pond. She could not move and almost dying. Our poets could not pass by her, one poet shifted the dove near the feed. Another poet changed the position not to down into the water. Next poet stroked her head gently. Everyone knew the life is fading either they had no way to save. However their tenderness became the last water of her end.

Green Park

We had also a pleasant time. A park was full of young family and old people. The bust of Mihai Eminescu was settled by promenade, we took group photo in front of the great poet. The banner of "Festivalul Mondial de Poezie Mihai Eminescu" was appealed this event to public.

We spent two hours in the park. I joined with Bolivian poetess talking about Maria Zambrano.

International Poetry Recital

The historical theater reminded me a movie, "Les enfants du Paradis". Poets gave reading their poem next to next, as I expected, their performance was great, audience were attracted by the reading.

We need not any explanation on the poet, just wanted to listen to the voice of poet. Only a few minutes we were intoxicated in the magical reading.

Here was also given chamber music. Violin, contrabass, cello, piano played Romanian music, very sentimental numbers...I almost shed tears.

Young prayer gave three encores, and the last one was “Balada by Porumbescu”, which I loved very much. In Japan, Atsuko Temma plays it in every concert.

Badad of Nostalgia

How triste!
Tears shed
By fine melodies
It has cured sadness
Stained on the ground

Next was my reading. I read “Festoon” in Japanese and English. Romanian translation followed. I wore Kimono at this chance. For I expressed appreciation the organizer and the city to lead me and colleague poets’s friendship.

Courtesy Visit

We paid courtesy visit in the city hall. The Mayer was intellect and young lady. Very energetic because the city was nominated as “Cultural Capital in Europe 2017”. She asked us “How do you feel this city?”. Some poets answered. At the time, Ion Daeconiscu, the chair of this event, said to her, “Here Japanese poets brought translation of Mihai Eminescu, do you want to hear it?” “Sure” she answered. I was embarrassed. I never expected to read it such a situation. I explained “ I tried to find translation of him but I could not, so that I asked my Romanian friend to give me English translation and I did it.” She pleased very much to hear Japanese reading...

Night Walk in Craiova

Old town
In Craiova
Young people
Heated in talk
Until midnight

To Targ-Jiu

Targ-Jiu was 70 Km far from Craiova, local poets welcomed us and prepared a party for us. We also gave poetry reading. I read “Guitarist”. Someone shouted “Genius!”, and Nikoka Madzirov also praised my poem.

The wide garden, which had many cages in which a pair of ostrich, white pigeon, peacock, ducks, where was full of fresh air from surrounding mountains. We were treated with BBQ party accompanying good songs. In Romania, music is anytime with us. Then participants began to tap and dance, next to next they join in the circle, which was enlarging. At last, all program of the festival was going to finish.

Romanian Dance

Gift from Heaven
Potatoes are sweet
Grapes are round
Circle of dance is
Going to enlarge

After the Fest

Poets departed in the early morning to Bucharest. I did not say good-bye to some of them. Fine! We will meet again, may be soon. It is not the end but the start.

The bus were closing to Bucharest, we got to the Bucharest North station, I stretched my right arm to Turkish poets sitting on my back, they did not untied my hand. Our hands told a lot. Large hand was Metin, small hand was Muesser, strength-ness and weakness were language for us.

Departure of Poets

Departure of poets
Holding my hands
The strength and weakness
Tell feelings of us
Real sign language it is
At Bucharest

A poetess, the author of “Duet of Dreams” Clelia Ifrim called on us in the hotel Ambassador. We talked about poetry and enjoyed town walk around Revolution Square, Athens music hall. She had atmosphere which poetess may behave as like her. I recalled a picture of Rossetti from her figure .

Old-looking Romanian Orthodox Church ---Both side were donated candles, left side

was for dead people, right side was for living people, she taught me, So I dedicated one for mother and daughter. The day was Buddhist service day.

In the square of revolution, antique book fair by the university students, also exhibition of contemporary art were seen. Peaceful scenes, many doves sank their body into the grass for nap. Here was also settled a statue of Mihai Eminescu, a bouquet was dedicated.

Red Roses

Recalling militants
Dedicated the life
To the Revolution
Red roses smile
At statue of Mihai Eminescu

I carried out all mission in the festival and write this prose in the flight to Paris with good fatigue and many memories. A field of clouds spread and under it the ground of European countries spread. I pray for their happiness.

(FIN)



ルーマニア素描

偽ガイド

ブカレスト空港についたのは深夜だった。翌朝にクラヨバへ詩祭から送迎車がくるということで、安心して就眠した。そして、ロビーで待合せ、時間通りきてくれた。ブカレストの観光名所リストの英語版をみせ、どこへいったら行きたいですか？と聞いてくれた。美術館を所望した。

「明日はどこへ行きたいですか？」「今日中にクラヨバに行きたいのです」「いいですよ、そのホテルはどこですか？」ふとおかしな気がした。「あなたはCさんですよ」「いえ、朝に従兄から頼まれてきたんですよ」いよいよ怪しい。そこで日本語ガイドを通じて詩祭主催者に電話してもらおうとガイドの電話を借りて事情を話した。すると「それはおかしいですよ、いま詩祭のスタッフがロビーで待っています」とのこと。ホテルに戻るよう言ってくれた。そして無事に詩祭スタッフと合流できたが、偽ガイドは消えてしまった。

平原を突っ切る

三時間のドライブ。車窓には、どこまでもどこまでも続くヒマワリ畑。採種の時期なので、枯らした花は、たつぷりと夏を溜めて、平原を黒く染めている。

トウモロコシも豊かな土壌をひけらかすように威張って並んでいる。ふとアステカの痩せた実入りのないトウモロコシが思い出された。

やはり食糧が一番大事、これを忘れると国は危機に陥る。自給できれば何も怖くない。ルーマニアの豊かな収穫に感じ入った。

点景

見渡す限り
農地広がる
ルーマニア
牛連れ歩く
農婦穏やか

再会

五年ぶりに会ったベルギー詩人も、メールでやりとりしているせいか、数日ぶりの気楽さで迎えてくれた。積もる話で数時間あっという間にすぎた。

そのうち詩人が集まってきて賑やかになってきた。60名の詩人、うち45名は、世界中から集まっている。マケドニアのニコラ・マジロフ、背の高い好青年だ。ルカ・ベナッシは、イタリアの若手詩人、セルビア詩人、トルコ詩人、

ロシア詩人、ボリビア詩人、若手も目立つ。

友情の輪

詩祭のよさは、気心と技量が知れるところかもしれない。何人も新しい友人ができてしまう。

この中には重要な詩人は何人かいる。イタリアのナンバーワン、ダンテ・マッフィア。いつも一番乗りで朝食にくる。一緒にテーブルについて楽しく話した。招聘すれば来てくれる承諾を得た。「光織る女」を進呈したら、すぐに声を出して読んでくれた。

開会セレモニー

オープニングは美しいホールで行われた。クラヨバ文化芸術アカデミーが文学、科学、音楽に至るまで何人も授賞するセレモニーに立ち会った。

土曜日であったので、街も活気に溢れていた。夜のオペラ劇場での朗読では、合間にオペラ歌手による独唱もあり花を添えられた。最後には合唱団の登場で初日の国際詩のリサイタルが締めくくられた。

傷ついた鳩

噴水のわきに、傷ついて動けない鳩がいた。傷口から赤い身が見えている。それを見過ぎていけないのが詩人一行だった。ある詩人がエサのある噴水の縁に移してやる。水に落ちそうだと、次の詩人が水際から離してやる。次の詩人が頭を撫でてやる。いずれ命の火は消えるとみな知っている。どうにもならないことも。でも彼らの優しさが鳩にとって最後の水となる。

緑深い公園

途中でお楽しみもあった。市民の憩いである公園。遊歩道にはミハイ・エミネスク詩祭の横断幕が高々と掲げられている。ミハイ・エミネスクの胸像の前で記念写真をとる。

この池をゆったりと一周すること二時間。ボリビアの女流詩人とマリア・サンブラーノの話をしたり、コスタリカの詩人と話したりした。

詩のリサイタル

会場はオペラ劇場。映画「天井桟敷の人々」の舞台のように三階席まである歴史的な建築だ。そこで次々と舞台にあがり朗読する。さすが世界に知られた詩人ばかり、観客を呑み込んでおられる。

前口上はいらない。その声、その詩が聴きたい。わずか数分の朗読なのに引き込まれる。言葉はわからないが、なぜか惹かれる。

ここでは合間に室内楽の演奏があった。ヴァイオリン、コントラバス、チェロ、ピアノのルーマニア音楽はロシア音楽にも通じているのか哀感がこもり胸がいっぱいになる。

若い奏者は三回もアンコールに応じてくれ、最後がポルムベルク作曲で日本では天満敦子さんの演奏で有名な「望郷のバラード」だった。

望郷のバラード

切なさ
極まりて
涙する旋律
大地に染みた
哀しみ癒やしぬ

いよいよ私の名前が呼ばれ、プロフィールが紹介される。舞台に上がり一礼してマイクへの、向かう。今回は「花づな」を朗読した。少し挨拶をした。「今晚は皆様、わたしは京都からまいりました。クラヨバは文化的で伝統的で京都と似ていると思いました。この街がすきです。では花づなを読ませていただきます。八行の短い詩です。最初は日本語で、次いで英語で。」そして、暗誦した。ルーマニア語の朗読が添えられた。

若草色の地に薔薇の柄の訪問着は、花づなに合わせたものだった。遥かな国での着物着装は、開催関係者や地元の人々そして詩人仲間の温かいもてなしに感謝を表せると思い持参していた。

クラヨバ市庁訪問

若く知性あふれる女性の市長は、この詩祭に支援を惜しまない。毎年この機会を楽しみにされている。今年は欧州文化首都に名乗りをあげているだけにエネルギーだ。

詩人からの質問にいくつか答えたあと、逆に詩人たちに質問された。「この街をどう思われますか」、何人か答えて一段落したそのときだった。主催者のイオン・デオゴニスクが言った。

「ここに日本から詩人がきてくれています。彼女はエミネスクの詩を日本語に翻訳して持参してくれました。」そしてマイクが向けられた。

わたしは答えた。「我々は京都と大阪からまいりました。エミネスクの詩を探したのですが、翻訳されていなかったのので、わたしが訳させていただきました。日本語の「淋しいポプラの木の下で」をお聞きください」 下田喜久美さんが美しく朗読してくれ、拍手喝采を受けた。良い記念となった。

夜の散歩

クラヨバの
旧市街には
深更までも
若き男女の
話が滾りて

トゥルグ・ジウの街へ

クラヨバから七十キロ離れたトゥルグ・ジウでは、地元詩人が歓迎の宴を張ってくれた。そこでも朗読があり、「ギタリスト」を日本語と英語で読んだ。ルーマニア語訳がそえられた。詩友から「ジーニアス！」と掛け声がかかった。ニコラも「ファドの詩、良かったよ」と後で話してくれた。

ここは広々とした敷地にある伝統の木造建築になるホテルで別荘を彷彿とさせる。ダチョウ、ハト、ウサギ、クジャク、カモ、ニワトリのケージがプールサイドにあって何ともユーモラス、まわりの景色に溶け込んで野趣を醸し出している。

夜はそこでバーベキューパーティーだった。民俗音楽の歌手が歌ってくれていた。ルーマニアではいつもそばに音楽があった。興にのって誰かが踊り始める。次々と加わる。最後には殆んどが輪に入り踊るなど、名残惜しく全プログラムの幕がとじられた。

ルーマニア舞踊

大地の恵み
馬鈴薯甘く
葡萄は円く
踊りの輪が
広がりゆく

祭りの後

詩友は翌朝の明け方にブカレストへ帰途についた。いく人かは別れも言えなかった。それもいい、いつかまた会うだろうから。すぐに会えることもあろうから。これで終わりではなく、これから始まるのだから。

我ら残った詩人たちも、翌日バスでブカレストに向かった。もう降りるとき、後部座席のトルコ詩人に後ろ手を出し、サヨナラを伝えた。彼らはわたしの右手を放そうとしなかった。大きい手はメティン、小さいのはムセル、強く握ったり、弱く握ったり、手で会話した。

詩人の別れ

詩人の別れー
手を握りしめ
その強さ弱さで
思いを伝える
真の手話なり

ブカレストにて

「夢の二重奏」の著者クレリア・イフリムがホテルに訪ねてくれた。詩のことを話したり、革命広場、アテネ音楽堂を案内してくれた。静か極まりない、クリスティナ・ロセッティの絵姿のようで女流詩人とはかくなるものかと思うほど、雰囲気がある人だった。

古色蒼然としたルーマニア正教教会の入口で蝋燭の献灯がされていた。左側が故人への、右側が生きているものへの祈りだと教えてくれた。私は亡母と娘に一本ずつ献じた。ちょうどお彼岸の中日であった。

革命広場では、大学の古本市があつたり、現代アートの展示があつた。アテネ音楽堂の前は、まったくもって平和な光景で、たくさんの鳩たちが深い芝生に身を埋めて昼寝をしていた。ここにもミハイ・エミネスクの立像もあって、花束が捧げられていた。

赤い薔薇

革命広場に
命落とした
闘士を偲び
詩聖の像に
薔薇の花束

詩で交流しているせいで、クレリアとは初対面なのに手をつないでの散策。歩き疲れてイタリアレストランでジェラートの休憩をした。そして再会を約して別れた。

最後の夜は近くのスーパーで惣菜や飲物を買込み、部屋で打ち上げパーティーをした。細かい棘がいっぱいついた短い胡瓜、平べったい桃、可愛い小さな林檎が珍しかった。

市場にて

平たい桃に
小さい林檎
原種の味か
富士王林は
芸術品なれ

すべてが終わり、心地よい疲れと、いっぱい思い出を胸に、いまブカレスト
発パリ行きの飛行機でこれを書いている。眼下には雲海がひろがり、その下
には欧州の大地が広がる。皆の幸せを祈りたい。



When closing eyes...

When closing eyes, I remember Bucharest. Hotel Ambassador was facing to the main street.

The entrance was a small one, two doors welcomed us, but I realized the building was big later checking in. The lobby is also pretty, but it is not negative condition. It was comfortable for me. The exchange counter is settled in the right side of the entrance, the speed of exchange is amazing, some minutes were enough to be done. (Just between us, I and readers, in Japan, how much time it is needed? I am wondering what reasons do they have. More than 10 minutes we have to wait sitting on the sofa in the bank.)

Going out the hotel, I walked down to the south. Then I found a book store. The name was Libraria Mihail Sadoveanu. I entered to look some books of my friend published. Stationaries and new book were placed. There were interesting space in the back of the store. White chairs and sofa would be for the reading and launching event. I wished such a lovely space in book stores of my country. This book store is not selling books, but selling the pleasure reading books. Kids are reading picture book on the sofa, and parents enjoyed selecting favorite books. At there authors and poets might deliver the talk about their book. It is not insensitive one as a sign event but more closing and dense one.

I went out the shop and walked down more, then I stopped at the traffic signal. Then I found a super market to the left, MEGA IMAGE. I agreed with my scent. Fresh vegetables, meat, everything we could see. I and my friend poetess and her husband got something to eat, "Mariko san, look this, how cheap this bread is! In Japanese yen, it is 45 yen!"

Recalling daily foods during 10 days, I did not have fishes. Then I found fried cod fillets in the market I was glad and took one. But it is not the taste what I imagined. In Romania, chicken and meat cuisine were main plate. And potatoes, mashed, boiled, fried, we tasted sweet one every time.

When closing eyes, I remember the days. We have not enough time to go shopping so that I took something for souvenir in a corner side of cafe and drive-in shop. And shops in the airport. Only I brought things to recall Romania were a few small cans of lip balm, greeting cards, and two books of Cioran and Giordano Bruno. But my baggage got so heavy not to hold up. For poets gave me books, and local hosts gave us great picture books, and so on. My case was full of books. Yes, what I brought in Romania was books, and brought out Romania was also books.

And I have a souvenir which is getting heavy as time goes by. The precious time talking and exchanging with poets gathering from all over the world and local poets. And a fact, I have loved this gentle country.

目をつぶれば・・・

目をつぶれば思い出す。ホテル・アンバサダーはブカレストの大通りに面していた。

入口はドアが二枚分の小さなものだったが、それは大きな建物であることが、後で分かる。ロビーも狭いものだったが、それもマイナス条件ではない。とても快適だった。入口の右側には、両替の窓口もあるし、そこでは一分もかからずに両替をしてくれたし・・・（ここだけの話、日本ではなぜ両替に時間がかかるのだろう。何を調べているのか、手続きしているのか、十分以上はかかる）

ホテルを出て、南へ歩いていく。すると本屋がある。詩友の本を探しに入ってみたら、入口に文房具や新刊書があった。奥のほうには白い椅子が並んでいて、出版披露会や読み聞かせのスペースがあった。これが、日本の本屋にあれば!本という物を売るのではなく、本を読む楽しさを売っている。子供も絵本を読めるソファもあり、大人もゆっくりと選べる。ここでは、詩人や作家が来て、お話をするのだ。売れたらサインをする無料なものではない。もっとじっくりと濃厚な時間だ。

本屋を出て、なおも行くと信号がある。赤信号で待つ間に左角にスーパーを見つけた。「MEGA IMAGE」という店だ。さすが嗅覚は鋭いと自分ながら感心する。生鮮食料品お惣菜、家庭用品まで何でも揃う。ここで夕食の材料を買ってホテルの部屋で食べたのも楽しい思い出だ。「マリコさん、見て。このパン。日本円で45円ですよ!」

ルーマニアでは10日間いたが、一回も魚料理に出てこなかった。だからスーパーでタラのフライらしきものを見つけたので買ったが、思っていた味ではなかった。ほとんどがチキン料理、肉料理が交互で、付け合せのポテトがたっぷりだった。それもマッシュだったり、ボイルだったり、フライだったり。毎日料理法が変わっていた。お味は、とても日本人に合うものだった。

目をつぶれば思い出す。お金を使う時間もお店もなく、カフェの横に売っているプレッツェルや、ドライブインでの買い物しかなかった。あとは空港のショップ。もともと買い物はしないので、薬屋でリップバームを買ったり、グリーティングカード、シオランの本を買ったりしただけだった。それなのに、バゲッジは持ち上がらないほど重い。詩友が本をくれたり、行く先々で写真集（立派なもの）をくれるから、荷物は本だらけ。持っていたのも本だし、帰ったのも本だった。

そして、時がたつと重くなるお土産があった。色々な詩人と知り合い、話を楽

しみ、過ごした貴重な時間。土地の人々とも交流ができたこと。そしてルーマニアが好きになったことだった。

Sketch in Estonia

Willow of Tartu

Droop branches almost reached the surface of the Emajõgi river. The willow trees reminded me of the Kamo river in Kyoto, I heard Emajõgi meant Mother River from a young staff Aileen. White sea gulls enjoyed life on the river. Where did they come from? Baltic Sea? Tartu ought to have no seas nearby. In front of me, a pigeon appealed her breast glittering on red purple. A sightseeing boat moored at the shore, an oblong flag was fluttering. I burned in my mind, such a peaceful scene after breakfast. It was 8 a.m., an impatient bicycle student passed by me, he might be in hurry to attend a class of Tartu university. I thought Tartu city started its day in such a way. The temperature was only four degrees centigrade. Fair or foul, in spite of May, people wore winter clothes. Snow was mingled with rain sometimes.

Prima vista International Literary Festival

The literary festival blessed with good weather seems to have been waited for pleasantly from children to adults in the city, The festival poster was seen everywhere. Many events extended during the festival at thirty-six places. The sturdy old trees offered the shade, if they sat down there, people could listen to reading poetry, shake their body in music. The afternoon of the spring sometimes invited them to a nap under trees. The contrast of the young people's enjoying fully freedom and aged people's tasting literature's fragrance, children's cheer interrupted between them.



Reunion

The city hall building was colored in light pink, and -a book fair- was held in a square. We entered into a big tent to see, then I heard someone addressing to me. "Mariko!", Professor Taimi Paves found me unexpectedly. We have no appointment at the day. Indeed two years passed after our last meeting in Autumn two years ago. She and her friend visited Kyoto to cooperate in completion of translation. The translation never be completed without her effort. "I came to Estonia, Taimi" We were delighted of reunion and certainty of the literary cooperation realized.

The poets who embodied poem

Stages of music and reading aloud weren't also one and two. Our picture also matched the poster stuck on everywhere. Everyone could join with those events without admission fees. When the fit was on them, they attend some events. If they missed it and felt the loss. Indeed the yearly festival partook of delight in spring. We kept admiring the young poet's making experimental sound to embody poem.



Paper crane in Estonia

Every occasion we participated in overseas poetry festivals, calligraphy works were gifted by Mr. Mamoru Nakanishi for the gift to organizer and friends. Now we had a chance to show "Japanese poet's reading", so I exhibited the calligraphy works and little bookmarks produced by Mr. Hitoshi Namino in a small Japan corner. Also I displayed three big paper cranes which I folded using an Estonian wrapping paper. The site was located in a Botanical garden of Tartu University. The evergreen trees and my friend's vermilion Kimono was matched very well. Audience could be glad to see such an Oriental atmosphere, reading Japanese poems and Shakuhachi (Bamboo flute) fantastic music by an Estonian player.



Japanese poet's reading

We met an Estonian poet Professor Jüri Talvet in Como, Italy and Kosovo poetry festival and Croiva, Romania. Yes, he was also an universal poet and we opened up completely. He taught on Dante's Divina Commedia for a long time in Tartu university. Professor Taimi Paves taught Oriental studies in Tallinn university as an expert of Japanese culture. We gave a reading, Taeko Uemura's 12 pieces, and my 12 pieces with Estonian actress's reading .





Miss Shangri-La

A Vietnamese student of Tartu University was taking pictures. She pointed to a calligraphy "桃源郷", and asked me "What is this calligraphy written as?" . I explained "It is Togenkyo, the fabulous place to be in the north of your mother country. Her face brightened, she recalled that. I gifted the calligraphy to commemoration. And I named her a nickname "Miss Shangri-La" After the event, she sent us many photo pictures with a note "I'd like to read more your poems". Miss Shangri-La seemed to open a door of literature.

Restaurant Pierre

Our reading event ended successfully, and we walked in the rain to look for a good restaurant. Professor Talvet invited us in a classical French restaurant. We're surprised to the interior of Restaurant Pierre with luxurious art deco style. Drawings of Estonian famous painter Eduard Wiiralt were displayed. He explained us that he worked in Paris the age of red windmill. He wasn't not so popular worldly, but he would be more appreciated. Estonian people liked him.

Insomuniason

The last two days "INSOMUNIASON", meant insomnia+marathon, was held. Stage performance lasted 24 hours, from 10 a.m. to 10 a.m. of next morning in "Literary house". One performer was given thirty minutes at there, music and reading poems etc. Audience could join in-out freely. We attended 10 a.m. and return to the hotel to take a rest and joined again from 8 p.m. to see stage performance. A director was Mr. Whitehead, American poet. A white long mustache was knitted beautifully. Miss Kaisa

Ling usually studied very much to be obtained a doctorate degree of Spanish literature, but at the special night, she sung blues powerfully on the stage.

Aida wearing a miniskirt

We are invited to an opera “Aida” on the last day of the stay.

I was noticed that it was a modern opera, and I imagined a costume and stage was simple, but I never thought that was so fresh and original. It was entirely interpreted just modernistic, and a war and a conflict of love were being expressed. A young singer appeared having a smart phone, Aida did also wearing a miniskirt. I'd like to describe development, but I'd like to do another chance. During a long interval when singers made their throat rest, we had a drink while chattering at a beautiful hole.



Bus station

When I looked down from the sixth floor of the hotel, it was a big bus station, an old woman hurried even very early morning. No one was here. It seemed me that she was not hurry but a feeling (she had to go somewhere) was making her body more advanced. Buses were coming in and out one after another. We bought a ticket to Tallinn airport, too.

At the end of travel

Estonia was quiet country and I felt easy and comfortable to stay. The temperature would rise up to only 24c in summer. The shopping center was located next to the hotel and a riverside was good for a walk. It was a kind to Kyoto by the point as an old capital that a university was embraced. IT governance ran already and the IT was enhanced more as a national policy. We promised to extend more literary exchanges, and left Tartu.

エストニア素描

タルトゥの柳

母の川という名のエモヨギ川の河畔には柳を思わせるしだれ枝の木々。海もないのにどこから住みついたのか白いカモメたち。赤紫にぎらりと胸を光らせた鳩。ホテルの岸波に係留された遊覧船に旗が風にはためいていた。朝七時、出勤に急ぎ足の人びと、授業へと気の逸る自転車学生。このようにタルトゥの一日が始まる。気温は摂氏四度。五月半ばなのに冬服を着ている。時折は雨に雪がまじる。

プリマヴィスタ国際文学祭

好天に恵まれた文学祭は、子どもから大人まで楽しみに待たれていたらしく、街挙げてのイベント。三十六会場で繰り広げられる。京都御苑の大木の松に負けない逞しい老木が緑陰を提供している。座ったら眠くなりそうな春の午後、人々は詩を聴いて、音楽に身を揺する。自由を謳歌する青春と、老人たちのコントラストに、子供たちの歓声が割り込む。



再会

市庁舎は薄いピンクの建物で、広場には大きなテント張りのブックフェアが催されていた。物見がてらに入ってみると「まりこさん」とタイミ・パヴェス女史の声がした。二年ぶりの再会だ。思い出せば、京都に来られたのは翻訳の仕上げに協力していただいた一昨年の秋。その翻訳もついぞ完成し、こうしてエストニアで朗読会を開いていただく。再会の喜びと、連携の確かさを実感できた一日だった。

体現する詩人たち



音楽や朗読のステージも一つやふたつではない。至るところに貼ってあるポスターにわたしたちの写真もあった。とにかく自由、参加は自由ですべて無料。見なくては損という風で、まさしく春の喜びを分かち合う恒例行事である。若手詩人の実験的な音作りには感心するばかりだった。

エストニアの鶴

いつも海外詩祭に参加する度に、中西衛氏から書道作品を頂戴し、現地でお世話になる方々の贈物としている。今回は、日本詩人の朗読会と言うので、展示するとともに少々演出をした。作品をズラリと並べ、波野仁氏手作りのしおりもディスプレイし、さらに大きな折り鶴を配した。和服の朱が後ろの常緑樹が引き立たせていた。エストニアの尺八奏者と朗読で観客にはオリエンタルな雰囲気喜んでいただけた。





日本詩人の朗読会

ユーリ・タルヴェット教授はイタリアのコモ詩祭、コソゴ詩祭、クラヨバ詩祭で一緒だったので、すっかりと打ち解けている。タルトゥ大学の教授で、ダンテの神曲を長年講義していたそうだ。タイミ・パヴェス女史は、タリン大学の教授で、日本文化に造詣が深い。この朗読会では、上村多恵子さんの12編の詩、すみくらまりこの12編の詩を、エストニア人の女優さんの訳詩つきで朗読した。

ミス・シャングリ-ラ

タルトゥ大学博士課程で学ぶベトナム人留学生が写真撮影をしてくれていた。その彼女が、書の「桃源郷」を指差し「これはなんと書いてありますか」と尋ねてきた。わたしは、「あなたの母国、北方にあると信じられている夢のように幸せな境地ですよ」と説明した。そして彼女も思い出した。その書を記念に上げた。以来、彼女のニックネームは ミス・シャングリ・ラとなった。詩をもっと読みたいと、写真の添え書きにあった。

レストラン「ピエール」



ようやく我々の朗読会が終わり、雨の中ランチに良い店を探し歩いた。

フランス料理店ピエールに入って、豪華なアールデコ風の内装に驚く。エストニアの画家エデュアルド・ヴィラールの作品が飾られている。赤い風車の時代にパリで画業をしたという。国際的には知られていないがエストニアでは人気があり、ユーリも気に入っている。

インソムニアソン

最終日にかけて「インソムニアソン」と題して、朝10時から翌朝10時までステージがある。「文学館」会場では一人三十分が与えられ、音楽や朗読をする。観客は自由に出入りできる。我々は夜8時から10時、そしてホテルに帰り、翌朝9時から10時のステージを鑑賞した。ディレクターはアメリカのホワイトヘッド氏。白い髭をきれいに編み込んでいた。我々を世話してくれるカイジャ嬢はスペイン文学の博士号を取るため忙しくしているが、この夜ばかりは力強くブルースを歌っていた。

ミニスカートのアイーダ

詩祭も終わり、滞在最後の日は、オペラ「アイーダ」に招待された。モダンだとはきいていたが、衣装や道具立てが簡素なものと想像したが、そうではなかった。まったく現代的解釈をされ、戦いと愛の相克を表現していた。いきなりスマホを持った男とミニスカートのアイーダが登場する。展開を述べたいが、別の機会にしたい。歌手がのどを休ませる長い幕間の休憩では、美しいホールでおしゃべりしながら飲物をいただく。



バスステーション

ホテルの六階から見下ろすのがバスステーションだ。誰もいない時間に、一人急ぐ老女。何をしに行くのか、歩くというより、行かねばという気持ちが体を前に進ませている。バスは次々に入り出ていく。我々もタリンまでの切符を買った。

旅の終わりに

夏は最高でも24度というエストニアは、静かで過ごしやすく快適だった。ホテルに隣接するショッピングセンターも、散歩に良い川岸も、心地よかった。大学を擁した旧都という点では京都と似ている。それでも電子政府やITを国策とする注目の国、我々はさらに文学交流を進めようと約束しタルトゥを後にした。

TRAVEL SKETCH

Mariko Sumikura

March 1, 2023

(C)Japan Universal Poets Association